

原点

なりひらいちへいた
成平一平太

「こらっ一、またやってる。公園の水を盗むんじゃない」

秋も終わり初冬の小春日和、児童公園のベンチに腰を降ろし、単行本を開けていた川北恭一の耳に大きな声が飛び込んできた。おもわず恭一はその主を求め視線を解き放した。大きな声を張り上げたのは、七十歳は過ぎていられると思われる白髪の老人だった。どうやら幼い兄妹を水飲み場から追い払っているようだ。

恭一は、六十歳の定年と同時にこれまで勤めていた会社をあつさり退職した。準大手の製薬会社の営業部長だった恭一の退職は会社にとっても痛手とばかりに重役陣から再三の慰留工作がおこなわれたが、恭一には何の未練もなかった。百八十度の転換

人生を画策していたのだった。もっともその代償として離婚を余儀なくされた。長年連れ添った恭一の妻、敦子は市役所の生涯学習課々長の肩書を持ち、定年退官までの残りの二年を無事に過ごせば、外郭団体が新たな椅子を用意してくれる。つまり六十五歳までは、なんら苦勞をすることもなく人並み以上の給与が保証されているのだ。

「あなた、おかしいわよ。せっかくの慰留を断って居酒屋のおやじをやりたいなんて。一千万以上の年収を捨てることになるのよ」

呑み屋のおやじの女房なんてまっぴらとばかりに、小さなマンションを購入すると敦子は一人暮らしを始めた。二人の娘は、すでに所帯を構え独立をしていた。そんなこともあつて、恭一たちの離婚については特に異議をはさむことなく静観といったところだった。もっとも離婚をしたとはいえ、敦子も二人の娘も月に一度の割合でそれぞれが恭一の店に呑みにとやってきてはいた。だからといって、恭一のマンションを訪ねるようなことはなかった。

恭一と敦子の離婚にあたって、それまで暮らしていた一軒家は手放した。手元の資産とともに綺麗に折半とした。結果として二人の娘にとつて実家と呼べるものはなくなった。

退職と同時に、敦子の老後については何ら心配することはないとばかりに恭一は、居酒屋の物件探しに没頭した。小田原駅に近い、住宅街の入り口といった処に居抜き物件を見つけることができた。駅に近いとはいえ、立地条件的には勤め帰りの客を期待することもできず繁盛するとも思えなかったが、家族を養つていく必要もない。生活においては年金があり困ることはない。趣味としての居酒屋経営であり、なによりも手頃な価格が魅力だった。特に改装する必要もなくそのまま使うことにした。一箇月あまりを費やして厨房も店内も磨きあげ、真新しい縄暖簾と白い大きな提灯を店の前に掛けた。提灯には墨で、やつとかめとしるした。名古屋弁で久し振りにという意味だ。開業して三回目の冬を迎えた。

検事だった恭一の父親は五・六年毎に転勤を繰り返した。母とともに恭一は全国の官舎を渡り歩くことになったが、その両親もすでに他界している。

恭一には、物心がついたころの記憶として雪深い北陸の町がある。一方、小学校高学年のころの恭一に鮮烈な記憶として灼熱の太陽が照りつける砂浜となり響くエレキギターの音がある。

転校を繰り返した恭一には、故郷と呼べる地がなかった。それでも中学生だった恭一の心になぜか「やつとかめ」という方言が残った。なぜこの名古屋弁が忘れられないのか恭一自身が不思議に思っていた。

常連でなくてもいい。数箇月振りに想いだしたようにでも足を運んでもらえれば。そんな居酒屋を恭一は目指していた。だからといって客との対話を望んでいるのではない。行き場のない想い。耐えられないほどの悲しさ、寂しさは誰もが持っている。それらを表に出すことなくじっと耐え、顔に出すこともなく男も女も毎日を暮らしているのだ。傍目には幸せそうに見えても自分の想いを押さえ込み、子供たちの行く末だけを願つて必死に頑張っている者も

いる。特に何かに不満があつたわけではないが恭一もそんな人生だった。

そうした人たちが独り静かに酒に語り掛けられる居場所を恭一はつくりたかつた。大勢でわいわいと賑やかに呑む酒もあるだろう。友と語り合いながら呑む酒もあるだろう。しかし恭一が求めたのは独り静かに心を癒すことのできる場所だった。

結果として恭一は、数人連れの客の入店は「すみません、あいにくと予約でいっぱい」と断り、頑に独り客専用としての居酒屋を作り上げていた。まれに二人連れの客を容認することもあつたが恭一的心情を承知している客に限られていた。

そんなこともあつて、十二席のカウンターが埋まることなど皆無だった。いつも半分以上の椅子が店の雰囲気づくりの演出役に徹することになった。

やっとかめは、いつも夕方の六時から深夜十二時までを営業時間としていたが、その時の客の想いを優先し追い返すようなことはしない。のれんと提灯を仕舞い込むと、客が腰を上げるまで恭一は、も

くもくと翌日の仕込みに精を出した。

日曜日の今日は、やっとかめの定休日だった。

洗濯を済ませ小春日和の日溜まりで体を癒しながら久し振りに読書がしたいと近くの児童公園に出掛け、大きな榎の樹の下に設けられたベンチに腰を降ろした。

十一月に入つてまもない夕暮れ間近い季節。砂場にもブランコにも子供の姿は見当たらない。時折、コツンと微かな音がする。何か小さな物が恭一の足元で動いた。コツン。ドングリが地面に落ちて転がっているのだと気付くまでに単行本のページが数枚めくられた。

「あーちゃん、冷たくなーい？」

「へいきだよ、おにいちちゃん」

トイレの近くの水飲み場で兄妹らしき二人が蛇口の下に頭を突き出して洗っている。小学校の二・三年といったところの男児が妹の頭を泡立てていた。これが夏の熱い盛りなら恭一には微笑ましく写った

のかもしれない。しかしこの季節に公園の水道を使い、しかもシャンプーをしていることに違和感を抱かずにはいられなかった。しばらく二人の様子を見ていると、洗髪が終わった妹の頭を兄がタオルで拭いてやっている。

「あやね、じぶんでふける」

「じゃあ、こんどはお兄ちゃんが洗うから」

洗髪が終わると男児は持参してきた大きなペットボトルに水を入れ始めた。二リットルのペットボトル一本を女児が、二本を男児が抱えたところで大きな声が出たのだった。

二人の児童は、声に驚いたのか慌ててその場を離れ逃げ出した。

「あつ」

「あーちゃん、いいから」

幼い妹がペットボトルを落とした。男児は、妹を庇うようにしてそのまま公園を駆け抜けていった。

恭一は、女児が落としたペットボトルを拾い上げ、老人に幼い兄弟の素性を尋ねた。どうやらこの兄妹

は古い小さな借家に住む母親との三人暮らしのようだ。水道代を節約するためなのか公園の水を日に何度も汲みにきては持ち帰っているらしい。いや、運んでいる量からして水道代が払えず止められているのかもしれないことだった。

恭一は泥だらけになったペットボトルを洗い、老人から聞いた借家を訪ねた。

やつとかめから歩いて十五分といった距離に借家があった。築三十年、いや五軒ほどの借家をぐるりと囲むブロック塀の状態からそれ以上になるのかもしれない。風雨にさらされたその肌は荒く、角が丸みをおびている。原型を留めていない箇所さえある。「おにいちちゃん、あやねもういちど公園にいつてくる」

「今日はもういいよ。八本もあればトイレの水は困らない。また明日だ」

「おにいちちゃん、ごめんね」

「いいよ。あーちゃんは、まだ小さいんだから」

恭一は借家の玄関先で引き戸を開けるのを躊躇し

た。玄関脇に取り付けられた電気メーターが作動していない。この親子の暮らし向きが手にとるように見えた。小さな子供が幼い妹を庇いながら懸命に生きている。この子供たちの親はなにをしているんだ。恭一の胸に怒りにも似た感情が込み上げた。

「おにいちゃん、お腹すいたね。あやねもうねる」

「そっか、お腹がすいたのか。じゃあ待っている」

お兄ちゃんがパンを買ってきてやるから」

「うん。でもママに朝もらったお金は貯金箱に入れてしまったよ。来月のママのお誕生日のプレゼントを買うんだから」

「だいじょうぶ。お兄ちゃんには空き缶を売ってためたへそくりがあるから」

「空き缶・・・」

恭一には思い当たるフレーズだった。あの公園の片隅で週に一度、カミングアウトした人たちが集めてきたアルミ缶を業者が買い取っている光景を何度か目にしたことがある。

「そんな大人たちに交じってあの子は・・・」

家の中から漏れる幼い兄弟の会話を聞いた恭一にも子供たちが母親を慕っているのが伺え、胸の中に固まり掛けていた怒りがゆるやかに解けてゆくのがわかった。

「どちら様ですか？」

引き戸を開けた男児が、家の前に立つ恭一を不審そうに見上げた。

「ごめん、ごめん。驚かせたね。その公園にこれを落としていったから・・・」

恭一にとってこれほどに小さな相手と会話をする事など久しくなかった。嫁いでいったとはいえ、二人の娘たちにはまだ子供はいない。どう会話をすればいいのかわからなかった。しかし、子供たちの事情も知りたいと思った。いや、困っているならなにか助けてやれることはないのかとさえ思い始めていた。

「ありがとうございます」

恭一が差し出したペットボトルを受け取りながら男児が頭をさげた。

「いや、いいんだ。ボク、名前は？」

「新堂峰章といいます。妹は彩音といいます」

男児の受け答えの中に暮らしぶりとは違い、母親のしつけの良さを感じずにはいられなかった。

「峰章さんと彩音ちゃんか。いい名前だ」

「おじさんは？」

彩音が峰章に隠れるかのようにしながら恥ずかしそうに顔を出した。

「おじさんは、川北恭一といいます。よろしく」

恭一は精一杯の愛想を振りまきながら彩音の問いに答え、視線を土間に落としてからさりげなく室内へと移した。

土間には子供たちの靴がきちんと揃えて並んでいる。履き古してはいても薄汚れてはいない。着ている服も量販店のバーゲン品かもしれないが、よれてはいない。貧しくても子供たちの身なりには気が配られていることが伺える。

「峰章君も、彩音ちゃんもお腹がすいているんだろ？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「おじさんの家はね、やっとかめというんだ。児童公園の向こう側の大通りに出る手前の道を右に曲がった処。峰章くん、知ってる？」

「知っています。白い提灯のお店ですよ。おかあさんが久し振りって意味だと教えてくれました」

「そう。おかあさんが・・・」

この子供たちの母親は名古屋の出身なのかもしれないと恭一は思った。

「よっし、ちよつと待ってる。おじさんお店に戻って引き返してくるから、どこにもいかないで。いいね、どこにも出掛けないでね」

恭一は、念を押すと小走りですぐ店へと引き返した。厨房に入るやいなやガスコンロに鍋を掛け、自転車の荷台に発砲スチロール製のトロ箱を乗せた。

「あの子供たちにおでんを食べさせてやろう」

恭一が呟いた。ころなしか頬の筋肉が緩んでいるようにさえ見える。鍋が沸騰すると恭一は鍋ごと

トロ箱の中におでんを入れ、子供たちの待つ借家へと向かった。

「峰章くん、お茶碗やお皿を持ってきてくれ」

恭一は、扉を開けるなり大きな声を出した。声は弾んでいる。峰章と彩音が揃って顔を出した。恭一は、部屋の中に上がり込むと台所のテーブルにトロ箱ごと熱い鍋を置いた。そして、おでんの湯気を狭い家の中に解き放つかのように鍋の蓋を開けた。

「おにいちゃん、いいにおいがする。おいしそうなにおい」

「おじさん、ぼくたちお金が・・・」

「子供がそんなこと気にするな。おじさんのおごりだ。遠慮するな。昨日の残り物だ。それよりお皿と箸だ」

「おにいちゃん、あったかいものたべるのひさしぶりだね」

彩音が熱いおでんに箸をつけた。

「彩音ちゃんおいしいか？」

「うん。おじさん、おいしいよ」

「峰章くんもどんどん食べる」

遠慮がちな峰章に恭一は「足らなければもって持ってきてやってもいいぞ」と付け加えた。

「おにいちゃん。おかあさん、はやくかえってくるといいのね。そうすればあったかいのがたべられるのね」

「大丈夫。鍋ごと置いてゆくから。おかあさんが帰ってきたら温め直せばいい」

彩音の屈託のない言葉に恭一は考えることなく温め直せばいいと口にしてしまったが、その瞬間に後悔の念にかられた。公園の水飲み場からペットボトルで水を運ぶ幼い兄妹。玄関脇の電気メーターが回っていない。ガスコンロがあっても火が点くとは限らない。お湯沸を沸かすことができないから冷たい水で頭を洗っていたのかもしれないと。

「ただいま」

「あつ、おかあさんだ」

彩音が溢れそうな笑顔で玄関先へと走った。

恭一は、複雑な思いだった。どんな母親なのか見て

みたいと思う気持ちと、どう言葉を交わせばいいの
だとの思いが絡み合っていた。

「彩音、どなたかお客様？」

「うん。やっとかめのおじさん」

「やっとかめ？」

母親の顔が曇った。貧しい小さな借家を訪ねて来
るような人物に心あたりがなかったのだ。

「おじさんがね、あったかいおでんをもってきてく
れたの。おっきなおなべにいっぱい」

「おでん？」

「うん、とってもおいしいよ。おかあさんのぶんも
あるよ」

「すみません。お留守にかつてに上がり込んで」

恭一は申し訳なさそうに頭を下げた。もちろん笑
顔を添えることを忘れなかった。

「いえ、どちら様か存じませんが子供たちに・・・」

幼い兄妹の母親が目の前で恭一に戸惑っているの
が伺える。恭一は恭一で想像していたよりも若い母
親だと思った。口紅をさしているわけではないが貧

しさをその容姿からは感じとることはできない。バ
ーゲン品を着古しているのかもしれないが見ずばら
しさも感じられない。子供たちの言葉使いといい、
この母親の育ちの良さと、その性格の良さが読み取
れるような気がした。

「私は、児童公園を駅に向かったところで居酒屋を
やっている川北といいます。お母さんもどうですか。
空になった鍋は明日にでも取りにきますから」

恭一は、それだけ口にするとう母親と体を入れ換え
るように履物に足を入れた。

「ご厚意ありがとうございます。新堂亜紀子とい
います」

子供たちと恭一がどのような関わりを持ったのか
は亜紀子にはわからなかったが、他意がまったく感
じられない恭一の人柄に素直に頭を下げた。

「おや、お客さんかいめずらしい」

八十近い老婆が怪訝そうな視線を恭一に向けなが
ら入ってきた。恭一はこの老婆の用向きが気になっ
た。がしかし、このまま玄関先に立ち止まって様子

を伺うわけにはい。老婆の背中が恭一に語りかける。
「なにしに来たのかは知らないが用が済んだらささと帰ったら」と。

恭一は家の外に出るとガラス戸を閉め、中の様子を伺うかのように聞き耳を立てた。

「新堂さん、私も年金と家賃収入だけで暮らしている。小さな子供を二人も抱えて暮らし向きが楽じゃないのはわかっていられるけれど……。新堂さん、溜まった五箇月分の家賃はもういいから。そのかわり今月中に出てくださいよ。いいね」

亜紀子には、返す言葉がなかった。溜めてしまった五箇月分の屋賃と引き換えの十日の期限。亜紀子にはとてつもなく大きな苦境ではあっても子供たちとその影を見せることはできない。

「おかあさん。ぼくはどんなところでも平気だよ」

小さな峰章は亜紀子の顔を見上げて笑った。峰章にも老婆の残していった十日の期限の意味が理解できた。今の母親にとつてとてつもなく大きな障害であり、その代償として今よりもっと厳しい生活

が待ち受けていることを覚悟せねばならない。

「峰章ごめんね、心配かけて。でも大丈夫。お母さんがなんとかするから……」

重く暗い空気を峰章の前から払拭するかのよう
に亜紀子は、「ねえ、お母さんもおでん食べたいな」と膝を落とし、峰章の両手を優しく取って精一杯の笑顔をつくりながら口にした。

「おかあさん、はやく。まだあつたかいよ」

彩音が笑顔を振りまく。

「新堂さん、差し出がましいようですが良かったら店の二階が空いていますので引越してきませんか？」

老婆がすれ違いさまに投げた冷たい視線を無視するかのよう
に恭一は玄関ドアを開けるなりこの母子に救いの言葉を投げた。亜紀子には恭一がなにを言っているのか理解できずに戸惑った。

新しい住まいを求めるときにはそれなりにまとまった金が必要となる。僅かではあっても蓄えがないわけではない。峰章と彩音の学資保険を解約すれば用意

できなくもない。しかし亜紀子はそうはしたくなかった。二人の子供を抱えての離婚。つましやかな生活をしながらも生活保護を受けることなく頑張ってきた。生活保護を受けることになれば子供たちに肩身の狭い思いを強いることになる。保険も貯蓄もあきらめねばならない。

別れた夫は、亜紀子の父親が理事長の肩書を持つ病院に患者として入院していた。時折、理事長室を訪れていた亜紀子と愛し合うようになり親の反対を押し切って駆け落ち同然で二人は岐阜を離れた。その時すでに亜紀子は峰章を身ごもっていた。大学を卒業するのを待ち構えての離郷ではあったが幸せな日々が続いた。しかし、長くは続かなかった。彩音が産まれるころには二人の間には溝ができて始めていた。争いごとも多くなり、仕事もやめて賭け事に走る夫に、「子供の父親として相応しくない」と終止符を打ったのだった。

亜紀子は峰章を何としても医者にしたかった。そのためにと峰章が産まれると同時に学資保険に入

った。離婚と同時に亜紀子には大きな負担となった。離婚と同時に亜紀子には大きな負担となった。月々の保険料。しかし、挫折するわけにはいかなかった。

「おじさん、ご親切ありがとうございます」

戸惑っている亜紀子に代わって峰章が口を開いた。この親子に選択の余地などないことはわかってはいても、始めて言葉を交わしてどれほどの時間も経ってはいない。恭一の言葉をそのまま受け入れていいのだろうか？ 哀れみの入り交じった親切心からのおでんであったのならば、この先において負い目を感じながら子供たちは成長してゆくことになる。二人の子供の心情を亜紀子は思い余っていた。そんな亜紀子の胸の内を察してなのか峰章が頭を下げながら言葉を続けた。

「お母さん、僕も彩音もお母さんと一緒ならどこでもいいよ」

「お兄ちゃん、おひっこしするの？」

彩音が、心配そうに峰章の手を引っ張った。

「彩音ちゃん、おじさん家の二階にお引っ越しだ。」

ちっちゃいけどお風呂も台所もある。電気もガスもお水だつてあるよ」

「ほんと。じゃあ、公園の冷たいお水でシャンプーしなくてもいいの？」

「ああ毎日、あつたかいお風呂に入ればいい」

「やったあー。おかあさん、おひっこししよー」

彩音の物おじしない屈託な笑顔に亜紀子は背中を押されるように恭一の親切心に甘えることにした。

「新堂さん、今から見に行きませんか？ そんなに広くはなくても二部屋ある」

初冬の陽が落ちるのは早い。恭一は彩音を自転車の荷台に乗せて引いた。亜紀子と峰章はその後ろに付いた。

「ねえおじさん。おじさん家にはだれがすんでいるの？」

「おじさん家か……。おじさんは独りで暮らしている。でもお店に住んでいるわけじゃないから。遠慮はしなくてもいいよ」

「ふーん。ひとりかあー。寂しくないの？」

「もうなれたから平気さ」

「そうなの。でもさみしくなったらいいってね。あーちゃんがおはなしあいてになつてあげるから」

「そつかあ、ありがとう。あーちゃん」

「どんぐりころころどんぐりこ、おいけにはまつてさあたいへん……。さあたいへん……」

独り暮らしと聞いて、その寂しさを紛らわしてやるうかとも思つたかのように幼い彩音の歌声が恭一の背中に響いた。

やつとかめの裏は駐車場になつていた。裏口のドアを開けると小さな土間があり階段が設けられている。土間の左のドアは店との仕切り役を果たしているのだろうが開け放たれていた。そしてそこには、腰ほどまでの長いのれんが掛けられている。のれんの隙間から店の様子が亜紀子にも見てとれた。白く長いのれんにはやつとかめと墨書されていた。恭一が自分で描いたものだった。

狭い階段を二階に上がると小さな台所が設けられ冷蔵庫が置かれていた。どちらも開店いらい使つて

はいない。恭一は、亜紀子母子を部屋の中に招き入れた。

「そんなには広くはないが二部屋ある。小さいとはいえ台所もあるので生活に困ることはない。トイレはお店と共同で使ってもらおう。お風呂も下にあるので使えばいい」

「ありがとうございます・・・。それで・・・お家賃は？」

住処を移るとなれば敷金などまとまった金が必要とする。亜紀子には毎月の家賃が気になった。

「そんなのはいらない」

恭一は特に顔の表情を帰るでもなくサラリと口にした。

「そんな、いくらなんでも」

「どうせ使っていないのだから気にすることはない。暮らしのめどがつくまで仮の住まいと思えばいい」

「・・・」

今月末までにはと申し渡された期限。なんとかな

るとは思ってはみても、なんらあてがあるわけではない。家賃の何倍かの金を用意するには子供たちの教育資金にと毎月の給与からわずかな金を絞り出して貯めた貯金を崩さなければならぬ。頭の中に浮かんできたさまざまな重しが砕けて消えてゆく。亜紀子にとってこれほどにありがたい申し出はなかった。が、言葉がでなかった。

「電気もガスも水道も遠慮はいらぬ。但し、階下にはお客さんが居ることだけは承知していてもらいたい、そんなに響くこともないだろう」

「なにからなにまで甘えることしかできません」

「峰章くんもあーちゃんも毎日温かいお風呂に入れるぞ」

「ほんと、やったー」

峰章が初めて子供らしきを見た。

「さてさて、そんなに甘くはないぞ。条件が一つ。毎朝の一時間ほど、みんなでトイレとお店の掃除をすることを約束してもらおう。どうですかお母さん、それなら気兼ねせずに住むでしょう」

「はい、必ずそうさせてもらいます」

「じゃあ、決まりだ。これまで溜まった家賃は大屋さんの言葉に甘えればいい。ロハだ。こんどの日曜日の朝に引越しだ」

幸いなことに朝から天気恵まれた。恭一が出入りの酒屋から借りた軽トラックでの引越しは、僅かに二往復の荷物量しかなく三時間ほどで終わった。

「さあ、なにかも片づいた。お腹がすいたのでしょうお昼にしましょう」

そう言うと恭一は階下においてカウンターに立った。

「新堂さん。峰章くんもあーちゃんも」

のれんごしに顔を二階に向けて恭一が声を掛けた。恭一の母子の背中を押すかのような声に遠慮がちなだった子供たちがカウンターの前に腰をおろした。

「どうぞ、引越し祝いのそばだ」

湯気の立つどんぶりには大きなえびの天ぷらが二

匹づつ乗っていた。

「すごい。こんなのたべたことない」

彩音は目の前におかれたえびに溢れそうな笑顔を見せた。

店の造りは子供の客を想定してはいない。恭一はカウンターの椅子を厨房に運び調理台の上に二つのどんぶりを置き直した。

「そばがたりなければおかわりしてもいいぞ、峰章君くん」

「はい、ありがとうございます」

「おかあさん、たべないの？」

「そんなことないよ、彩音」

「どうしたの？ おかあさんないてるの？」

亜紀子は離婚してからこの二年、人の親切に触れたことがなかった。実家を出てきたいきたちから親を頼ることもできず、子供たちを気づかいながら貧しさと戦ってきた。今、目の前におかれたどんぶりから立ち上がる湯気が亜紀子の涙腺を刺激した。

「新堂さん、冷めないうちに・・・。これからのこ

とは焦ることもない。生活を建て直すことが先決だ」

「はい。色々ありがとうございます」

亜紀子はもっと多くの感謝を口にしたかったが溢れそうになる涙をこらえることで精一杯だった。

「あーちゃん。どうだ、おいしいかい」

重苦しくなりそうな空気を彩音に言葉を掛けることで恭一は取り払った。

「うん。このえびぷりっぷり」

「そうか、ぷりっぷりか。やけどしないようにゆっくりたべろ」

恭一も溢れんばかりのやさしさの笑みを浮かべながらそばをすすった。

亜紀子たちがやっとかめの二階の住人となって二週間も過ぎると生活にもなれたのか厨房で仕込みをしている恭一の耳に母子の笑い声が微かではあるが聞き取れるようになった。

どうやら今日は亜紀子の誕生日のようだ。峰章と

彩音の歌声も聞こえてくる。恭一もなにか手料理でもと思ったが母子の大切な時間に分け入るのはやめにした。

「これ、あーちゃんと僕からのプレゼント」

恭一にプレゼントの中身がなになのかは知る由もない。わずかな小遣いを使うことなく貯め、空き缶を拾って金に替えた全てを充てたことを恭は知っている。亜紀子は二人の子供を抱きしめ嬉し涙を流しているに違いない。もっとも仕切りドアを閉めれば、客がやっとかめに求めてくる癒しを邪魔するような空気は遮断できた。

恭一は、仕切りのドアを開けて二階から漏れてくる母子の温かみを感じながら包丁を動かすことに楽しみを感じるようになっていた。

「だめよ、峰章」

恭一の手を亜紀子の大きな声が止めた。恭一は仕切りに掛けられたのれんをめくって、二階に顔突き出すと聞き耳をたてた。

「峰章、あなたは大きくなったからお医者さんになる

の。中学を出たら働くなんて考えないで。おかあさん頑張るから」

こころなしか亜紀子の声が震えている。おそらくは峰章の目をじっと見つめながら言い聞かせる亜紀子の胸の内はやりきれない悲しさと、自身の力のなさに打ちひしがれながら峰章を論しているに違いない。階下の恭一には手にとるように小さな部屋の空気が見て取れた。

今の生活の厳しき、母親の苦労は幼い峰章にも心が痛いほどわかる。空き缶を拾い集めてはわずかな金に替え、彩音が腹を空かせばパンを買って与える。母親が子供たちに渡す小銭さえも使うことなく子供ながらに耐える習慣が身についている。峰章にしてみればそんな母親を一刻も早く楽にしてやりたいたの思いからにちがいない。

翌日から恭一は峰章の勉強を見るようになった。峰章の成績は必ずしも良くはない。嫌がる峰章のランドセルを開け、出てきた答案用紙には○の数より遙かに多い×。

「峰章君、医者を目指すかはともかく、もう少し勉強ができては人に使われるだけで終わってしまう。もつと広い目で世の中のことを見る力をつけなければだめだ。それにはまず勉強だ」

小さな子供に言っただけで理解できる話ではないことなど恭一にもわかっていた。それでも今の峰章の成績では世の中を渡ってゆくには厳しいものがあると恭一には思えた。

翌日から恭一は、峰章が学校から戻ると店の中へと呼んだ。カウンターの椅子に下駄を履かせ高さを調整すると、そこに毎日二時間ほど峰章を座らせた。仕込みをしながらではあったが小学三年生程度の学習に恭一は難なく対応できた。宿題、予習、復習を毎日繰り返し、時には問題集を買って与えた。峰章は嫌がるでもなく恭一に従った。

勉強の成果は著しいものがあつた。二箇月もしない内に学校でおこなわれる答案用紙から×が消えた。びりに近かった成績が学年のトップクラスとなり称賛をあびるようになった。

二階の母子の暮らしぶりも落ち着いてきたかに
恭一には見えた。生活の厳しさに変わりはなくても
安定した日々を送っているのであらう、笑い声が毎
日のように包丁を動かす恭一の耳に届いた。

「昨日の残り物だけれどよかったら」

母子が越してくる前より多めの仕込みをしては翌
日に二階に運ぶ。仕事が終わわり、彩音を預けている
保育園から亜紀子が帰ってくる。

「やっとかめのおじちゃんたいま」

彩音がのれんの裾から顔を出して恭一に笑顔を振
りまく。亜紀子が続いて顔を出す。そして二階へと
上がっていく。

「いつもおいしいものをすみません」

しばらくすると、二階に上がった亜紀子が器を洗
って返しにくる。そんな毎日が恭一には楽しくてし
かたがなかった。

「いらっしやい」

入り口が聞く音に恭一が反応する。いつもは夕刻
の五時半にはのれんを表に掛ける。客の入りは早く

ても六時を過ぎたころだが、まれにのれんを掛ける
前から癒しを求めて格子戸を開ける客もいる。恭一
はそんな客であっても断ることはしない。

「まだ、お通しくらいしか出せませんがどうぞ」

恭一は、客の顔を見ることもなく包丁を動かす。

客がカウンター席に着いた気配で始めて顔をあげて
おしぼりをだす。

「なんだ、千晶。やっとかめじゃないか。今日は母
さんと一緒にやらないのか？」

上の娘の千晶が久し振りに顔を出した。

「お父さん、二階に女の人を住まわしているんだっ
てね」

千晶の顔に笑みが浮かんではいるがどこことなく怪
訝そうな雰囲気を言葉尻にただよわせている。どこ
で聞きつけたのか二階の母子のことを気に掛けて様
子を見に来たのだった。

「おお、二階の住人か。わけありでね、二階を貸し
ている。母親と小さな男の子と女の子だ。つい今ほ
ど母親と下の子が帰ってきたばかりだ」

「ふーん。わけありって」

「いい母子だぞ。上の子は峰章といって、とても頭のいい子だ。下の彩音ちゃんはかわいいさかりだな」

「独身なんだ」

「孫ってきつとあんな感じなんだろうな」

「ずーっと住まわすの？」

「はいよっ。ビールとお通し」

かみ合わない父子の会話は続かない。恭一は相変わらず包丁を動かしている。

「あの母子は、ここに住んでいるようじゃ子供の芽を摘んでしまう」

カウンターの脇に置いてあるおでんの様子を見ながら恭一が千晶の間に応えるように口にした。

「摘んじゃうってどういうこと？」

「峰章君は血筋なのか頭がいい。環境しだいです。だけでものびる資質をもっている」

「へえ、そんなに頭がいいんだ」

「ああ、少なくとも千晶の小学生のころよりは数段上だ」

「悪かったわね。私のも血筋よ」

「そりゃあそうだ」

「ねえ、お父さん。お母さんが心配していたわよ」

「心配？ なにを？」

「独りで大変じゃないのかって」

「なんで今さら」

「寂しいんじゃない？」

「母さんは天下り先でも、それなりに仕事を楽しんでいるんじゃないのか？」

「やっぱ誰でも歳を取ると話し相手が欲しいんじゃないの」

「だったら、頻繁にここにこればいい。金なんていつも取らないんだから・・・千晶、明日にでも誘ってやってくれ」

「お母さんは二階の住人のことが気になって遠慮しているのよ」

「言っている意味がわかんねえ」

「お父さんと何かあるんじゃないかと・・・」

「バカ言ってるんじゃないよ」

「来週早々にでもお母さんをさそつて出直す」

恭一が注いだコップのビールを呑みほすと千晶は腰を上げた。

「あつ、もうしわけありません」

空の鉢を持った亜紀子は、のれんを潜るのと同時にカウンターの席の千晶に気がついた。亜紀子は、詫びを口にするのと奥へと引つ込もうとした。

「いいんですよ新堂さん。私の娘です」

「千晶といます」

恭一に押されるように千晶が口を開いた。

「そうですか。お嬢様ですか。新堂亜紀子と申します。お父様には口では言い表せないほど大変お世話になってます」

亜紀子はそれだけを言うと空の鉢をカウンターの隅に置き、深々と頭を下げ二階へと上がつていった。

「ずいぶんと育ちの良さそうなひとね」

「おまえにもそれがわかるか」

「失礼ね。それくらい私にだって……。でもそんなお嬢様がなぜ居酒屋の二階に間借りを？」

「人生には計り知れないことがあるつてことさ」

「ふーん。じゃあ、お父さん私帰る」

「本当に帰るのか？ いいじゃないかせつかく来たんだし。呑んでいけよ。何かすぐにつくるさ」

「ありがとう。でも安心したし、来週といわず明日にでもお母さんと出直す」

立春も過ぎ、暦の上で春とはいっても寒さが身に沁みる。

「お邪魔します」

やっとかめの格子戸が開いた。分厚いコートを着た白髪の老人と品の良さそうな夫人が店の中に遠慮がちに入ってきた。夫人は淡いベージュのコートを着ている。どちらも高級なコートであることは誰の目にも明らかである。

「いらっしやい。どうぞ」

恭一は二人の客をカウンター席へと招き入れた。

「川北さんですね？ このたびはお手紙をいただきました。ましてありがとうございました。新堂でございます。」

家内とともにやってみました。」

コートを脱ぎ、深々と頭をさげる老夫婦。この物腰だけで何もかもを許し、苦境に喘ぐ娘と孫を迎え入れようとやってきたのが恭一にも見て取れた。

「川北です。遠いところをご苦労さまです。もうすぐ峰章くんが学校から帰ってくるころです。彩音ちゃんも保育園に行っていますので五時半ごろには亜紀子さんと一緒に帰ってくるでしょう」

「そうですか。ご迷惑でしょうがここで待たしていただいてもよろしいでしょうか？」

「どうぞ、どうぞ。なにもお構いほできませんが」「ありがとうございます。これはお口汚しかとは思いますが」

夫人が風呂敷包みを解いて持参した進物を恭一に差し出した。

「おじさん、ただいまー。今日も算数百点だ・・・。ごめんなさい。今日は二階で勉強します」

峰章は、いつも学校から帰るとランドセルを背負ったままのれんをすりぬけるかのように店の中へと

飛び込み、カウンターに教科書を抜げていた。恭一との勉強が楽しくてしかたがないのだ。しかし、今日は少し勝手が違った。カウンター席に客がいる。峰章はもうしわけなさそうに体を反転させた。

「峰章くん、いいんだ。こちらにいるのは君のおじいさんとおばあさんだ」

峰章には恭一の言っていることが一瞬ではあったが理解できなかった。

「・・・おじいさんとおばあさん？ 岐阜の？」

「そうですよ。峰章ちゃん」

祖母と峰章までの距離はわずかではあっても、初めて目の前にする孫の姿。駆け寄りたい衝動をあえて押さえ込むかのように祖母はゆっくりと進み、峰章の目線の高さに自身の目線を合わせるがごとく膝を床に着けてから、たぐりよせるかのように峰章を抱きしめた。

「ごめんね、びっくりさせて。お母さんも彩音ちゃんも元気にしてる」

「・・・」

峰章の目を見れば戸惑っているのがわかる。それでも嫌がる素振りを見せてはいない。

「峰章、おじいさんだ。もうなにも心配はいらない」

「新堂峰章です。小学校三年生です」

「そうか、三年生か。勉強が良くできるんだってな」

「やっとかめのおじさんがぼくの先生です」

「峰章くん、二階で母さんたちが帰るまでゆっくりお話をしていたらいい。あとでお茶とお菓子を持っていつてあげるから」

恭一に促されて峰章とその祖父、祖母は二階へと上がっていった。

五時半になって亜紀子が彩音をつれて帰ってきた。階段の下に揃えられた上物の男物と女物の靴。亜紀子にはすぐにその靴の主がわかった。「川北さん。両親がきているのですか？」

「新堂さん。差し出がましくは思いましたが、私のご両親に連絡をしました。峰章くんは優秀な頭脳を持っていてます。しかしそれも、それに見合った磨きをしなくては活かされません。失礼ではありますが

今の生活では限界が見えています。親子です。甘えでもないんじゃないですか」

峰章の三年生の終業式を待って、母子は岐阜へと引越していった。それからどれくらいか年月が流れたであろうか。恭一の頭にも白いものが多く見られるようになった。やっとかめの客の顔ぶれもずいぶんと変わりはしたが、癒しを求めてのれんを潜ってくることに変わりはなかった。

「いらっしやい。まだ仕込みが終わっていませんがどうぞお掛けください」

恭一は、いつものように包丁を動かしながら、まだのれんが表に掛かってもいないうちから訪れた客に小さく声を掛けた。

「ごぶさたをしております」

恭一は驚いた。声の響きが大人になりきっていない。声の主に顔をあげ「未成年に吞ませる酒はないぞ・・・」といいながら言葉が詰まった。

「峰章くんか？」

そう言いながら恭一は即座に自分を否定した。ここを出ていったのはついこの間、目の前にいるのは青年。「それほどに月日が経ったのか……」

「峰章です。その節は大変お世話になりました」

「そうかあ、峰章くんかあ。大きくなったな。で、皆さんお元気か？」

「はい。母も彩音も元気にしています」

「そうか、皆さんお元気で……それはよかった」

「それで、峰章くん。今日は……？」

「はい。おじさんをお願いがあつてやつてきました」

「お願い？ ああいいよ。わざわざ訪ねて来てくれたんだ。おじさんにできることなら何だつていいぞ。その前にここに座れ。酒を飲ませるわけにはいかないがお茶とおでんならいいだろう」

恭一は、嬉しさを隠しきれないのか体が小躍りしているかにも見える。

「で、お願いって？」

「じつは来週、大学の入試があるのですが最後の一

週間の追い込み勉強をこの店の二階でしたいのです」

「そんなのはお安いことだけれど、呑み屋の二階じやあ気が散るだろう」

「いいえ、ここはぼくの原点なんです。ここから試験会場に行きたいんです」

「そう、ここが峰章くんの原点か」

恭一の胸を熱く込み上げてくるものがある。わずかに五箇月足らずではあったが二階に住んでいた母親と二人の幼子の笑顔が浮かんだ。

「そうか、もう大学入試か。当然、医学部なんだよな」

「はい。T大の医学部を受けようと思つています」

「T大の医学部。それはすごいや」

完